

保育唱歌「六球」の歌詞推敲について —豊田英雄の自筆文書から—

東 ゆかり（初等教育学科）

Revision of Lyrics for the *Hoiku Shoka* “Six Balls”: Focusing on Fuyu Toyoda’s Autograph Manuscripts

Yukari Azuma

Department of Primary Education, Kamakura Women’s University Junior College

Abstract

Hoiku Shoka (“Six Balls”; a collection of childcare and educational songs), with the lyrics written by one of the first Japanese kindergarten teachers of the Tokyo Women’s Normal School Kindergarten, Fuyu Toyoda (1845-1941), has long been an enigma for researchers in the field. The aim of this study is to clarify the creative process behind “Six Balls” by analyzing six autograph manuscripts concerning the songs written by Toyoda, which manuscripts are owned by Toyoda family. The study reveals that the lyrics to three out of nine of the songs, “Red,” “Yellow,” and “Blue” were devised more frequently in the song cycle.

Key words : *Hoiku Shoka* “Six Balls”, Fuyu Toyoda, manuscript

キーワード：保育唱歌「六球」、豊田英雄、文書

I. はじめに

保育唱歌は、1877（明治10）年から1882（明治15）年にかけて100数曲が作られ、その約1割が最後まで上申されなかった¹⁾。この上申されなかった唱歌の中に、東京女子師範学校附属幼稚園開設時に日本で最初の保姆となった豊田英雄（1845 - 1941）が作詞し、9人の異なる伶人によって作曲された「六球」の唱歌がある。

この「六球」の唱歌は、芝祐泰『保育並ニ遊戯唱歌』の「保育唱歌上」に記載されており、倉橋・新庄『日本幼稚園史』にも歌詞が紹介されている

保育唱歌である。しかし上申の記録が無く、藤田（1978）は「六の球9曲については、両写本²⁾共に含まれず、はっきりした作曲年はわからない。しかし、明治19年9月出版の『幼稚園唱歌』には含まれているので、これまでに作曲されていることは明らかである。」と述べている。藤田の分析によって、この「六球」の唱歌はフレーベル教育の手引書であるロンゲの『A Practical Guide to the English Kinder Garten』「Musical Gymnastic Exercise」の26. Ball, both yellow, red、27. My dress is like、28. Ball, how I do love thee、29. My ball

is soft、とその訳書である桑田新五『幼稚園』に記載されている、25. 毬ハ且黄且紅且緑ナリ、26. 我カ衣裳ハ青キ事天色ノ如ク、27. 毬ヨ我レ汝ヲ愛スル、28. 我毬ハ軟ニシテ且園ナリ、を元に作成されたものであることが明らかにされた。また、ヘルマン・ゴチェフスキ（2000）は「この9曲については謎が多い。多分歌詞は1877（明治10）年以前のもので、80年以後に作曲され、保育唱歌になった。その前にはわらべうた風に歌われたかもしれない。9人の作曲家は皆等級の低い伶人であることが目立つ。結局歌詞も作曲も質が良くないので最終の選定で落ちたと思われる。しかし9人の作曲家が同じ調で、同じ拍子で、同じ和琴伴奏で、似たような歌詞で、同じ長さのメロディーを作っているのは、ほかに見られない面白いケースである」と述べている。

筆者は、豊田の曾孫である高橋清賀子氏から「六球」の唱歌の文書が下書きを含め複数存在していることを伺い、豊田家の文書が寄託されている茨城県立歴史館を訪れ、豊田と同居していた孫の健彦氏、それを引き継いだ曾孫の高橋氏によって長年保管され未整理のままであった1472点に及ぶ豊田の文書の中から「六球」の唱歌の歌詞の推敲過程を示す4種類の下書きを探し出した。本研究に必要な文書の分析にあたっては、高橋氏の許可を得て茨城県立歴史館で撮影した写真を使用し、土浦市立博物館の村松常子、菅井和子両氏のご助言のもとでその分析をおこなった。

本研究の目的は、上申されなかった保育唱歌「六球」について、作詞者である豊田英雄直筆の文書の分析を通して、従来の保育唱歌研究の中でその存在が謎に包まれていた「六球」の唱歌の歴史の一端を解明することにある。

なお、茨城県立歴史館資料室における文書調査及び写真撮影は、2010年6月18日・19日、7月10日・11日、2012年2月20日・21日におこなった。

II. 豊田英雄の文書の分析

II-1. 豊田英雄と保育唱歌

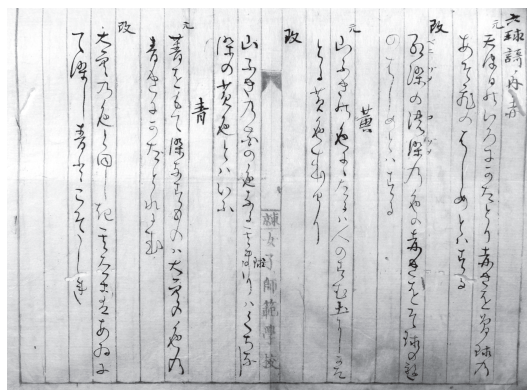
まずここで、豊田英雄と保育唱歌の関係について述べる。豊田英雄は、1875（明治8）年11月東

京女子師範学校開設時に読書教員として採用され、翌年11月に開園した日本で最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園で松野クララ³⁾、近藤濱⁴⁾と共に保姆となった。豊田は主席保姆松野クララから保育法の伝習を受け、その伝習の記録を「代紳録一浄写」「代紳録全」「代紳録二」に記した。清水（2010）の「代紳録」の分析により、それらの記録には第一恩物に関する記述の量が圧倒的に多く見られ、クララが第一恩物の使用法に多くの時間を費やしたのは保姆たちにフレーベルの「球の法則」を伝えるためであったことが明らかにされた。一方、フレーベル式教育を導入しようとした東京女子師範学校附属幼稚園では、フレーベル式教育で用いる遊戯歌に相当する歌の作成が急務となり、文部省へ唱歌の重要性を説く意見書を提出した⁵⁾。文部省は唱歌を重要な教科として位置づけ、幼稚園から依頼を受けた宮内省式部寮雅楽課の伶人たちが豊田ら保姆たちと協力して、保育唱歌と呼ばれる雅楽調の唱歌を作曲した。そして、この保育唱歌における豊田の主な役割が、訳詞と作詞であった。

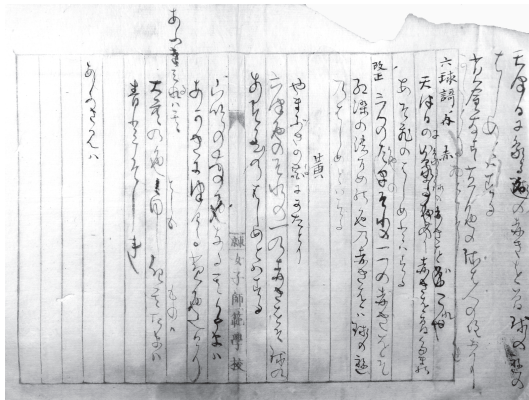
II-2. 豊田英雄直筆の6種類の「六球」の文書

茨城県立歴史館に保管されている豊田の文書には、下書きを含め全部で6種類の「六球」の唱歌の歌詞がある。それらの文書は以下のとおりである。

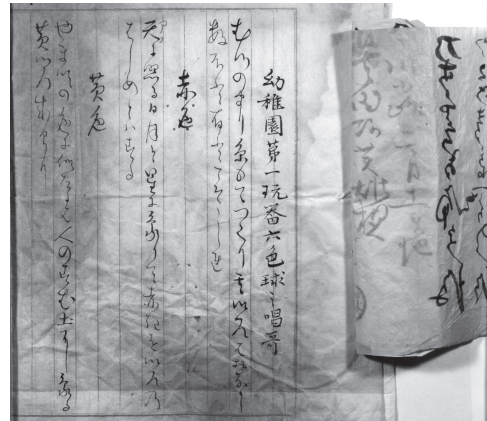
文章① (Fig 1)



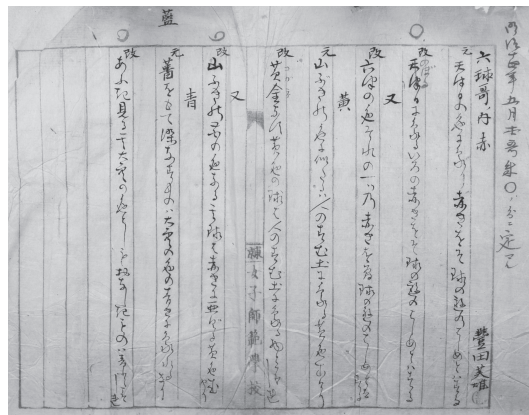
文章② (Fig 2)



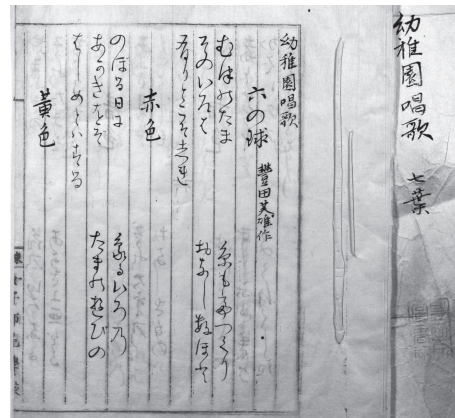
文章⑤ (Fig 5)



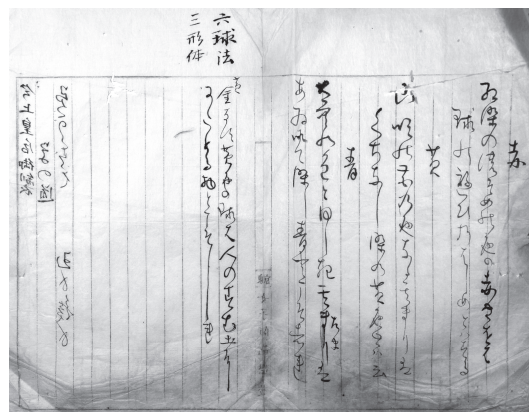
文章③ (Fig 3)



文章⑥ (Fig 6)



文章④ (Fig 4)



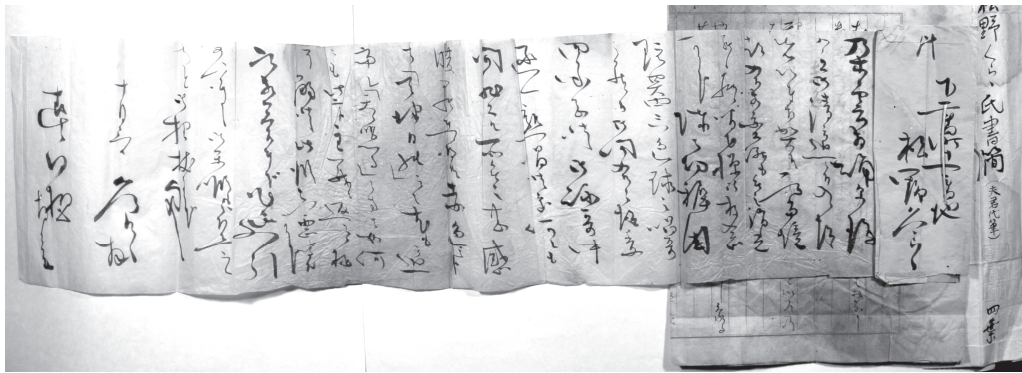
これらの文書にはいずれも歌詞の作成年月日は記されておらず、それぞれの歌詞の書かれた正確な日付を特定することが難しい。そこで、筆者は文書に記された手掛りとなる言葉に注目し、当時の歴史的背景と照らして合わせて分析をおこなうことにした。

II-3. 文書⑤「幼稚園第一玩器六色球ノ唱歌」と松野クララの書簡

まず、先の6種類の文書の中の文書⑤について述べる。この文書は、他の文書と異なり、松野クララが豊田に宛てた書簡に添えられていたものである。(Fig.7)

文書⑤には、冒頭に「幼稚園第一玩器六色球ノ唱歌」というタイトルが付けられている。ここに

Fig 7



使用された「玩器」という言葉は、明治9年1月刊行の桑田訳『幼稚園 巻上』の中で「第一に授くる玩器（てあそびもの）」として用いられた言葉であり、この唱歌の歌詞がフレーベルの第一玩器に関する歌であることがわかる。次に、この文書⑤が同封されていたクララの書簡について述べる。

この書簡には「10月3日」の日付が書かれている。この書簡は、豊田が、すでに幼稚園を辞任していたクララに「六球」の唱歌の歌詞の添削を依頼したことに對して、日本語の書けないクララが夫の松野礪の代筆によって返答したものである。

《原文》

松野クララ書簡（夫松野礪代筆） 四葉封 下
2番地十一番地 松野久良

朶雲拝誦、爾後 益々御清適被為入候趣 先以奉
拝賀候、鸞境 都合相変儀も無之消光罷居候間
乍憚御放念 可被下候、陳ば幼稚園 玩器六色球
之唱歌 之義ニ付御問合の趣委 曲承知仕候、御
詠歌中 逐一熟唱仕候、何レも 間然スル所無之
甚感 腹罷在候得共、赤色之部 は「天津日能」
云々尤も適 当シ「天ツ照る」之方如何ニも
些ト主義ニ返し候様 了解仕候、此段不悪御覧
可被下候 察答ヲ以乍延引 可上申候、御閑暇も
被在候ハ、ちと御枉杖可被下候、匆々
十月三日 久良ニ拝 豊田様拝上

《手紙の訳》

お手紙を拝見致しました。益々お変わりなくお暮らしのことお喜び申し上げます。私共も変わりなく暮らしておりますのでご心配なさいませんように。（さて申し上げますことは）幼稚園の玩具「六色球之唱歌」についてお問い合わせの件詳しく承知致しました。唱歌をよくよく唱ってみました、どれもよく出来ていて直す所はないように思い感心致しました。ただ赤色の分は「天津日能」云々が尤もふさわしく「天ツ照る」の方はちょっと主義に返じそうに思います。このところは悪しからず御覧になって下さい。察答（色々考えまして）遅くなりましたが、御返事さし上げます。お暇がございましたら（お遊びがてら）どうぞお立ち寄り下さい。

クララは明治13年2月28日に東京女子師範学校附属幼稚園を辞任している。この手紙は10月3日の日付があるが、「私共も変わりなく暮らしておりますのでご心配なさいませんように」という文面から察すると、この手紙のやりとりがクララの幼稚園辞任後のものであることがわかる。つまり、文書⑤の歌詞は明治13年頃に作成されていたものであることがわかる。次に、この手紙に添えられていた文書⑤の歌詞について述べる。

《文書⑤「幼稚園第一玩器六色球之唱歌」》

むつのまり糸もてつくり其いろはおなじ数ほと

有とこそしれ

赤色 天に照る日月と星に象りて赤きをいろのはじめとハする（天に「アメ」と朱色でふりがなが付けてある）

黄色 やま吹の色に似たるは人のすむ土に象る黄いろ成けり

青色 あいをもて染なすものは大空の色の青きに象れるなり（先に「ものところしれ」と書いてみちけしされている）

紫色 赤と青とまじへ染れハゆかりなる其むらさきのいろは出にけり

柑色 赤と黄とまじふときは樺色の其うつくしきいろと成りぬる

緑色 黄と青とまじへ染れハときはなる松のみどりの色は出にけり

元色 さまざまの色はあれども赤と黄と青こそもとの色といふなれ（「と」に朱色で濁点加え）

間色 かずかず色ハおほけとことごとく其もといろによるとこそしれ

豊田美雄

文書⑤の第1曲目の冒頭には「むつのまり」という言葉が使われている。これは明治13年に関信三に代わって幼稚園幹事となった小西信八が、それまでの恩物に関する用語を改訳した時に用いた言葉であり、六の球はそれまで使われていた漢語の「ロクキウハウ（六球法）」から「ムツノマリ」に変更された。このことから、このクララの手紙に添えられていた「幼稚園第一玩器六色球ノ唱歌」に書かれている歌詞は、明治13年におこなわれた恩物名称変更の時期以降に作成されたものであることがわかる。

ところで、クララは「唱歌をよくよく唱ってみましたが、どれもよく出来ていて直す所はないように思い感心致しました。ただ赤色の分は「天津日能」云々が尤もふさわしく「天ツ照る」の方はちょっと主義に返じそうに思います」とも述べている。

Ⅱ―4. 豊田美雄の文書の歌詞の推敲の軌跡

クララに宛てた文書⑤「幼稚園第一玩器六色球

之唱歌」は清書であるが、豊田は文書の①～④の下書きと思われる歌詞の書き換え作業をおこなっていた。そこで次に、これら4種類の文書の歌詞の比較をおこない、歌詞の推敲の軌跡を辿る。以下の各文書の歌詞の（ ）内は全て筆者の書き込みである。

Ⅱ―4―1. 文書①

六球譚ノ内・赤 元 天津日のいろにかたとり赤きをぞ球のあそびのはしめとハする

改 紅染めの濃染の色の赤さは球の遊のはじめとはする（「紅染め」「濃染め」の右横に「ベニゾメ」「コゾメ」とかなが振られている）

黄 元 山ふきの色に似たるハ人のすむ土にかたとる黄色なりけり

改 山ふきの花の色なる天まりハくちなし染めの黄色とハいふ（「まり」の右横に「球」と書き換え有）

青 元 菁をもて染めなすものハ大空の色の青きにかたとれるなり（藍と書こうとして菁と書いている）

改 大空の色と同じき天たまのあいにて染めし青とこそしれ

文書①の「改」の部分の歌詞は、文書②の推敲を経て書かれている。赤色・黄色・青色の歌について、「元」と「改」の2種類の歌詞が書かれている。赤色の歌詞は、文書②ではクララに宛てた文書⑤と同じ「色のあそびのはじめ」としていた箇所を「球のあそびのはじめ」に書き換えている。また文書②の「改正」で書き加えていた「六つのたまそのひとつの赤きをぞ紅染めの濃染めの色の赤きことは」を「紅染めの濃染めの色の赤さは」と五七調に整えている。黄色の歌詞の「元」は文書⑤と同じものである。「改」は「山ふきの」以降がくちなし染めの歌詞に書き換えられており、「天まり」の「まり」の右横には「球」と書き記している。青色の歌詞の「元」も文書⑤と同じものである。「改」は文書②の歌詞に「あいにて染めし」を加えて五七調に整えている。

Ⅱ—4—2. 文書②

六球謡ノ内 赤 天津日のいろにかたとり赤きをぞ色のあそびのはしめとハする（右横に「(天津日)に象る球の赤きことハこれ也」と書かれている)

改正 六つのたまそのひとつの赤きをぞ紅染の濃染の色の赤きことは球の遊びのはじめとはする

黄 やまふきの色はかたとり（と書きかけて行変えている）

六つ色のその一の赤きをぞ球のあそびのはしめとはする

山吹のはなの色なる天まりにハあかきにつげる黄色なりけり

あふきそれハ天の（この行は後から書き足したもの）

大空の色と同じき天たまハ青とこそしれ

（「(色と)同じき」の右横に「として」「天たまハ」の右横に「ものハ」と書かれている）

あふき色ハ（と書きかけたところで文章が終わっている）

文書②は、赤色・黄色・青色の歌の歌詞の作成途中を示すものであり、文書①の「改」の推敲過程と思われる。赤色の歌詞は、クララからの指摘箇所の「天に照る」を「天津日」に変え、「日月と星に象りて」を「いろにかたとり赤きをぞ」に、「赤きをいろの」を「色のあそびの」に書き換えている。上から書き直した形跡が見られ、右横には「(天津日)に象る球の赤きことハこれ也」と書かれており、言葉を何度も考えている様子が伺える。そして、「改正」として新しい歌詞、すなわち六の球の赤色が紅染めの濃染めの色であるという歌詞が加筆されている。しかしまだ五七調にきれいに整っていない状態となっている。黄色の歌詞は、五七調の歌詞が2種類書かれている。最初は文書⑤と違ったものを作ろうとして「やまふきの色はかたとり」と書きかけてから、先の赤色の歌詞を五七調に書き上げている。続いて書き上げた「山吹の」の歌詞は文書①の「改」へと移行していったことが伺える。青色の歌詞は文書①の

「改」の推敲過程である。「大空の」の歌詞の冒頭の右上に「あおきそれは天の」と後から行が書き加えられるなど、歌詞について試行錯誤している様子が伺える。

Ⅱ—4—3. 文書③

六球哥ノ内・赤 元 天津日の色に象り赤きをそ球の遊のはしめとハする

改 のぼる日に象るいろの赤きをそ球のはじめとハする（改の「天津」を「のぼる」と朱色で書き換え、改の上段には朱色で○印付）

又

改 六つの色そのひとつの赤きをぞ球の遊のはしめとはする

黄 元 山ぶきの色ににたるハ人のすむ土に象る黄色成けり

改 黄金なる黄色の球は人のすむ土に象るものところしれ（「黄金」にコカネとふりが有）

又

改 山ふきの花の色なる天球は赤きにつげる黄色なりけり（改の上段に朱色で○印付）

青 元 藍をもて染めなすものハ大空の色の青さに象れるなり（冒頭、「菁」と「藍」の中間のような誤字になっている）

改 あふき見る天の大空の色としておなじきことのハ青とこそしれ

（改の上段に朱色で○印付）

文書③は、書き出し部分の欄外に朱色で「明治十四年五月本歌朱○ノようニ定マル」と書かれている。これは、明治14年5月24日におこなわれた幼稚園への皇后宮行啓の際に使用することを念頭に歌詞の決定をおこなったものであることが推測される。この皇后宮行啓の日は、幼稚園の遊戯室で「君が代」「白金」「我行末」の3曲の唱歌が披露された。山東（2008）は唱歌における歌詞について、音楽取調掛が設置された明治12年頃は「儒教主義的な徳目の強調が顕著化した時期」であったことを指摘し、この皇后行啓の年である明治14年については、明治維新後の極端な欧化政策下から国粋主義が勃興した時期であったことを述べて

いる。そのような時期にフレーベル第一恩物の歌を披露することには容易ではなかったことと推察される。

先に述べたように、この文書③は、欄外に明治14年5月の日付で「本歌朱○ノようニ定マル」と歌詞が決定したことが朱色で書かれている。そして決定した歌詞の上段には朱色で○印がつけられている。赤色の歌詞は2種類書かれており、ひとつは文書①の「元」と同じ歌詞で、冒頭「天津(日)」の部分に朱色で消し「のぼる(日)」と書き換えており、その上段に朱色で○印がつけてある。もうひとつの歌詞は文書②の「改」の「六つの球」を「六つの色」に変え「紅染めの濃染めの色の」をカットし、最後は文書①の「改」の「球の遊びのはじめとはする」と同じ結びになっており、文書①と文書②の歌詞を混ぜ合わせたものであることがわかる。黄色の歌詞の「元」は文書①の「元」と文書⑤と同じものである。そして「改」は2種類あり、ひとつは文書④の最後に書かれていたものと同じで、ふたつ目は文書①の「改」の前半と文書②のふたつ目の歌詞の後半を組み合わせたものである。そしてこの組み合わせによる歌詞の上段に朱色の○印がつけられている。青色の歌詞の「元」は文書①の「元」と同じである。文書①では冒頭の「藍」を「菁(かぶ)」と書き損じており、文書③も「藍」にやや近くなっているが、やはり書き損じている。「菁(かぶ)」の色は白か紅染めの色であり、青ではないので明らかに誤字と判断できる。「改」は文書②で一端書きかけた文書①の「改」をさらに書き換えたもので、その上段に朱色の○印がついている。

II-4-4. 文書④

赤 紅染めの濃そめの色の赤さは球の遊びのはしめとハする

黄 山吹の花の色なる天まりはくちなし染めの黄色とハいう

青 大空の色と同じき天たまはあいにて染めし青とこそしれ(「天まり」の右横に「たま」と書き直している)

黄金なる黄色の球は人のすむ土なりかたとるも

のとこそしれ(上段に「六球法」「三形体」の文字有り)

文書④の歌詞は和紙の裏面に書かれており、表面には「今上皇后御製 学の道」というタイトルと、その冒頭の歌詞が書きかけの状態で記されている。この「今上皇后御製 学の道」は、明治14年5月24日の皇后行啓の日に東京女子師範学校の生徒たちが披露した唱歌のひとつである。豊田が皇后宮行啓の日の唱歌の選曲の仕事をしていた時にこの文書④の六球の歌詞を思いつき、忘れないうちに裏紙に書きとめたものではないかと推測される。文書④の赤色の歌詞は文書①の「改」と同じである。黄色の歌詞は、文書①の「改」と同じ「天まり」を使用しており、文書④は文書①の改を作る途中段階の走り書きであることが考えられる。青色の歌詞は、文書①の「改」と同じだが、文書①では「天まりの」となっている部分が「天たまは」と書かれている。そして、青色の最後に文書③の黄色の「改」が付け加えられており、青色の歌詞を書きながら黄色の歌詞を思いついて書きとめた様子が伺える。また、この部分の欄外の上段には、恩物の「六球法」と「三形体」という文字が書かれており、フレーベルの恩物を念頭に置いた歌詞の修正作業であった様子も伺われる。

次に、先の文書⑤と同様、清書のひとつである唱歌の綴り文書⑥について述べる。この文書⑥は、倉橋惣三が晩年の豊田の自宅を訪問し、豊田から直接手渡されて『日本幼稚園史』に記載した保育唱歌の綴りの歌詞と同じものである。

II-5. 文書⑥「幼稚園唱歌」

幼稚園唱歌 豊田英雄作

六の球 むつのだま糸もてつくりそのいろはおなじ数ほと有りとこそしれ

赤色 のぼる日に象るいろのあかきをぞたまの遊びのはじめとハする

黄色 やまふきの花のいろなるそのたまはあかきにつげる黄色なりけり

青色 あふぎ見るその大空の色としもおなじきものハ青とこそしれ

柑色 赤と黄とまじふるときハかばいろのその
うつくしき色となるなり
緑色 黄とあをとましへ染むれば常磐なる松の
みどりの色はいでにけり
紫色 赤と青とまじへそめればゆかりなるその
むらさきの色はいでにけり
元色 さまざまのいろはあれとも赤と黄と青こ
そもとのつ色といふなれ
間色 数々に色はおほけどことごとくそのもと
いろによるとこそしれ

文書⑥は、冒頭に「幼稚園唱歌 豊田英雄作」と書かれており、上申に至っていないこの唱歌が、豊田英雄自身の作詞によるものであることを明記している。文字が走り書きではなく丁寧に書かれていることから、この文書は清書のひとつであることがわかる。第一曲目「六の球」の歌詞はクララに宛てた文書⑤が「むつのまり」と書かれているのに対して「むつのたま」と改められている。「赤色」の歌詞は、文書③で決定された歌詞と同じである。黄色の歌詞は、文書③で決定された歌詞と同じだが、「天球」を「そのたま」に書き換えている。青色の歌詞は、文書③で決定された歌詞と同じだが、「色として」が「色としも」に、「おなじきことの」が「おなじきものハ」に変わっている。「柑色」の歌詞は文書⑤と同じだが、文書⑤では「成りぬる」と終えているところが「なるなり」と書かれている。「緑色」と「紫色」と「元色」の歌詞は文書⑤と同じである。「間色」の歌詞も文書⑤と同じだが、文書⑤の「色ハおほけと」を「色はおほけど」と濁点をつけている。文書⑤と文書⑥を比較すると、ふたつの歌詞はほぼ同じであるが、「まり」を「たま」と替えていること、そして、曲の順番が一部分入れ替わったことに違いがあった。文書⑤では「紫色、柑色、緑色」となっていた部分が、文書⑥では「柑色、緑色、紫色」の順に入れ替わっている。

Ⅲ. 文書の歌詞の推敲過程の結果

Ⅲ-1. 「赤色」「黄色」「青色」以外の歌詞の推敲過程の結果

6種類の文書の解説の結果、「赤色」「黄色」「青色」の歌詞について大きな書き替えがおこなわれていたことがわかった。一方、「柑色」「緑色」「紫色」「元色」「間色」については下書きが残されておらず、歌詞推敲の跡は残されていない。次に、度々書き替え作業がおこなわれた「赤色」「黄色」「青色」について、豊田がどのような歌詞の推敲過程を辿ったかを振り返る。

Ⅲ-2. 「赤色」の推敲過程の結果

「赤色」の推敲過程は以下のとおりである。

- ①天に照る日月と星に象りて赤きをいろのはじめとハする（文書⑤）→
- ②天津日のいろにかたとり赤きをぞ色のあそびのはしめとハする（文書②）→
- ③六つのたまそのひとつの赤きをぞ紅染の濃染の色の赤きことは球の遊びのはじめとはする（文書②）→
- ④六つ色のそのひとつの赤きをぞ球のあそびのはしめとハする（文書②）→
- ⑤紅染めの濃そめの色の赤さをは球の遊びのはしめとハする（文書④）→
- ⑥天津日のいろにかたとり赤きをぞ球のあそびのはしめとハする（文書①）→
- ⑦紅染めの濃染の色の赤さをは球の遊のはじめとはする（文書①）→
- ⑧天津日の色に象り赤きをそ球の遊のはしめとハする（文書③）→
- ⑨天津日に象るいろの赤きをそ球の遊のはじめとハする（文書③）→
- ⑩のぼる日に象るいろの赤きをそ球の遊のはじめとハする／又は／六つの色そのひとつの赤きをぞ球の遊のはしめとはする（文書③）→
- ⑪のぼる日に象るいろのあかきをぞたまの遊びのはじめとハする（文書⑥）

「赤色」の推敲過程を辿ると、これらの推敲過程の歌詞は松野クララとの書簡の後に書かれていたものであることがわかる。すなわち、クララからの助言である「天に照る」を「天津日」に変更

し、しかし、クララからの「ちょっと主義に返じ
そうに思います」というコメントを熟考し、一端
は染めの赤色の歌詞に書き換え、さらに「色の遊
び」を恩物の「球の遊び」に変えて、最終的に
「天津日」を「のぼる日」に書き替えて歌詞が定
まったことがわかる。

Ⅲ―3. 「黄色」の推敲過程の結果

「黄色」の推敲過程は以下のとおりである。

- ①やま吹の色に似たるは人のすむ土に象る黄い
ろ成けり（文書⑤）→
- ②やまふきの色はかたとり（文書②）→
- ③山吹のはなの色なる天まりにハあかきにつげ
る黄色なりけり（文書②）→
- ④山吹の花の色なる天まりはくちなし染めの黄
色とハいう（文書④）→
- ⑤黄金なる黄色の球は人のすむ土なりかたと
るものところしれ（文書④）→
- ⑥山ふきの色に似たるハ人のすむ土にかたと
る黄色なりけり（文書①）→
- ⑦山ふきの花の色なる天まり（球）ハくちなし
染めの黄色とハいふ（文書①）→
- ⑧山ぶきの色ににたるハ人のすむ土に象る黄色
成けり（文書③）→
- ⑨黄金なる黄色の球は人のすむ土に象るもの
ところしれ／又は／山ふきの花の色なる天球は
赤きにつげる黄色なりけり（文書③）→
- ⑩やまふきの花のいろなるそのたまはあかき
につげる黄色なりけり（文書⑥）

「黄色」の推敲過程を辿ると、「赤色」の歌詞を
染めの色に替えるにあたり、「黄色」もくちなし
染めの黄色と、一端染色の歌詞に書き換え、最終
的にあかきにつげる黄色と歌詞が落ち着いたこと
がわかる。また、恩物の六球を表す「天まり」と
いう言葉を挿入したが、最終的に「そのたま」に
変更している。

Ⅲ―4. 「青色」の推敲過程の結果

「青色」の歌詞の推敲過程は以下のとおりである。

- ①あいをもて染なすものは大空の色の青きに象

れるなり（文書⑤）→

②大空の色と同じき天たまハ青とこそしれ／あ
ふきそれハ天の／あふき色ハ（文書②）→

③大空の色と同じき天たまはあいにて染めし青
とこそしれ（文書④）→

④藍をもて染めなすものハ大空の色の青さにか
たとれるなり（文書①）→

⑤大空の色と同じき天たまのあいにて染めし青
とこそしれ（文書①）→

⑥藍をもて染めなすものハ大空の色の青さに象
れるなり（文書③）→

⑦あふき見る天の大空の色としておなじきこと
のハ青とこそしれ（文書③）→

⑧あふき見るその大空の色としもおなじきもの
ハ青とこそしれ（文書⑥）

「青色」の歌詞も途中で恩物を表す天たまを挿
入し、その後、藍染の歌詞に書き替えることを試
みている。これも「赤色」の歌詞の変更に伴う作
業と見られる。その後青色は仰ぎ見る天の大空の
色に変わり、最終的に天を省いて歌詞が定まった。

以上の結果、豊田の作成した六球の唱歌の歌詞
は、明治13年に恩物名称変更がおこなわれた時期
にクララの添削を経て赤色、黄色、青色の歌詞が
書き替えられ、明治14年5月の皇后宮行啓で披露
するために一旦は歌詞が定まり、その後再び書き
替えられて「幼稚園唱歌」として完成されたもの
であることがわかった。この文書⑥「幼稚園唱歌」
は、おそらく先の藤田の指摘にある明治19年9月
出版の鴻盟社『幼稚園唱歌』の頃までにおこなわ
れた書き換え作業であったと考えられる。そして、
この「幼稚園唱歌」の清書の一つが豊田宅を訪れ
た倉橋惣三に手渡され、『日本幼稚園史』に記載
されるに至ったのである。

Ⅳ. おわりに

前村ら（2010）の研究によると、豊田は桑田
『幼稚園』を使い易い実践向きの書と考えており、
東京女子師範学校附属幼稚園の見習生であった氏
原銀らに『幼稚園』を読むことを薦めていた。明
治11年6月に刊行された桑田新五訳『幼稚園 巻下』

の「手引草の歌」には、「此歌ハ體操の初に謠ひ或ハ第三第四に授る玩器と共に之を謠ふべし」と體操と玩器と共にそれらの歌の使用を促す一文が記されている。豊田は、この一文を念頭に第一恩物と共に用いる「六球」の歌詞を作成したと考えられる。それを裏づける出来事として、明治12年3月から明治13年6月にかけて、豊田が日本で二番目の幼稚園である鹿児島女子師範学校附属幼稚園開設のため単身鹿児島へ渡った際、それまで東京女子師範学校附属幼稚園では独立して扱われていた「唱歌」の科目を「恩物」の授業と一緒にこなう時間割に組み替えていた。

小笠原（2008）は、フレーベルが幼稚園教育のみならず、幼稚園就学前の家庭教育に関心を持ち、母親と乳幼児の身体的触れ合いを起点として『母の歌と愛撫の歌』を作成したことを指摘しているが、前村ら（2010）によると、松野クララも豊田たちにおこなった保育法の伝習の中で、一番多くの時間を割いたのは乳児向けの第一恩物六球法であった。松野は、乳幼児の教育の重要性を指摘し、明治20年2月に独逸学協会婦人懇親会でおこなった乳児の教育をテーマとする講演会の中でフレーベルの保育法を紹介し、乳児の教育には第一恩物球の遊びが有効であり、「何か調子の正しき小歌をうたいながら」おこなうことを述べている。おそらく、豊田が最初に六球法第一曲目「六の球」を作詞した時は、クララからの伝習を受けて第一恩物六球法をおこなう際に口ずさむ歌として作られたものであり、さらに桑田『幼稚園 卷下』の一文を読み、赤色以降の歌詞を作成したのではないかと考えられる。

これまで、保育唱歌は、西洋の音律に基く文部省音楽取調掛編纂の「小学唱歌集」や「幼稚園唱歌集」が発行される以前に雅楽の専門家集団である宮内省式部寮雅楽課の伶人たちが作成した雅楽調の唱歌であるという側面が重視され、雅楽調であるがゆえに西洋音楽への移行の過程でその役割が終わったと評価されてきた。しかし、東京女子師範学校の開設当初に豊田たちが作成した保育唱歌は、日本で最初のフレーベル式幼稚園の日々の保育に必要な唱歌遊戯として作られたものであっ

た。豊田たちが保育の活動を支える教材として作成していた初期の保育唱歌は、その役割が西洋の音律による道徳的歌詞の唱歌へと移行していく過程のなかで、その必要性が失われていったものと考えることが出来るのではないだろうか。

明治10年11月27日におこなわれた幼稚園開業式で保育唱歌を歌う園児の姿に感激した今上皇后が、明治14年5月24日に再び幼稚園を訪れるにあたり、豊田英雄は六球の唱歌が選定されるように文書③に記された歌詞の推敲作業をおこなった。しかし、皇后行啓の当日、この六球の唱歌は披露されなかった。時代は明治新政府による欧米志向の自由な教育から国家主義的教育へと政策が転換され、それと共に唱歌教育に求められる役割も大きく変わり、その結果フレーベルの教育書を手本として出発した保育唱歌もその役割を終えていった。今後は、豊田が書き残した他の文書の更なる分析を進め、保育唱歌が学校唱歌に移行する過程の中での豊田の役割がどのようなものであったのかについてさらに検討を重ねていきたい。

【注】

- 1) 保育唱歌は、藤田（1978）の研究によって1877（明治10）年からおよそ3年をかけて約100曲が作られたことが明らかになったが、その後『雅楽録』の一般公開により、その作成期間が1882（明治15）年まで続いていたことが明らかになった。
- 2) 式部寮雅楽課伶人の芝祐夏写本と東京女子師範学校卒業生の清水たづ写本。
- 3) ドイツで当時留学中の松野礪と知り合い、結婚のため1876（明治9）年8月に来日。東京女子師範学校附属幼稚園開設時から1880（明治13）年2月末まで同園主席保姆を務め辞任。ベルリンでフレーベル系列の養成校で学んだと考えられているが詳細は明らかにされていない。1876（明治9）年11月6日から豊田英雄たち保姆へ保育法の伝習をおこない、その内容は豊田英雄の文書「幼稚園伝習聞書稿」、「代紳録一浄写 松野久良々氏口授聞書」、「代紳録全」、「代紳録二」等に記録されている。
- 4) 東京女子師範学校附属幼稚園開設時から松野クララ、豊田英雄と共に幼稚園「保姆」となり、明治14

年11月に同園を辞任。幼少期から箏を嗜み、保育唱歌の和琴演奏や作曲をおこなった。

- 5) 東京女子師範学校附属幼稚園摂理の中村正直により文部省へ提出された意見書。文部省第五年報。

【引用・参考文献】

- F.Froebel, J.Ronge and B.Ronge, A Practical Guide to the English Kinder Garten, Thoemmes Press1994, England
江崎公子編 1991 音楽基礎研究文献集15巻 大空社 20-31, 521-524.
小笠原道雄 2008 未刊行資料の解説によるフレーベルの家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』の成立に関する考察 広島文化学園短期大学紀要第41号 1-12.
倉橋惣三・新庄よし子 1983 日本幼稚園史 臨川書店 234, 92-93, 247. 88-91.
桑田新五訳 1978 幼稚園 巻上(明治九年一月刊) 幼稚園 巻中(明治十年七月刊) 幼稚園 巻下(明治十一年六月刊) 複製第一刷発行 日本らいぶらり
山東功 2008 唱歌と国語―明治近代化の装置 講談社(選書メチエ) 19-20.
清水陽子 2010 明治初期のフレーベルの教育理論の受容に関する研究 日本乳幼児教育学会第20回大会口頭発表資料
曽我芳枝 2008 唱歌遊戯の成立過程に関する研究:『雅楽録』にみられる「保育唱歌」の作成過程から 体育学研究53(2) 297-313.
塚原康子 2009 明治国家と雅楽 伝統の近代化 国楽の創成 有志舎
中村理平 2000 洋楽導入者の軌跡 - 日本近代洋楽史序説 - 刀水書房 512-514.
藤田芙美子 1978 保育唱歌研究―フレーベル式幼稚唱歌遊戯移入の経過を中心として 国立音楽大学 創立五十周年記念論文集 329-369.
藤田芙美子 1991 「洋楽の作曲」を先駆けた明治の雅楽家たち 音楽基礎研究文献集別巻解説 154-155.
ヘルマン・ゴチェフスキ 安田寛他編纂 2000 伶人たちの唱歌～保育唱歌 原典による近代唱歌集成―誕生・変遷・伝播― ビクターエンタテインメント 49, 192-201.
本多佐保美 1997 明治期新作雅楽唱歌(保育唱歌)の音楽的性格明治初期における和洋折衷唱歌の具体 千

葉大学教育学部研究紀要Ⅱ人文・社会科45, 93-103.

- 前原晃・高橋清賀子・野里房代・清水陽子 2010 日本人幼稚園保姆第一号豊田英雄と草創期の幼稚園教育 建帛社 78, 111, 143, 127, 136, 138, 127, 162, 171, 299.
幼稚園教育百年史 1979「文部省年報」ひかりのくに, 775.

要旨

本研究の目的は、東京女子師範学校附属幼稚園開設時に日本人初の保母となった豊田英雄(1845-1941)が歌詞を作成した保育唱歌「六球」について、豊田自筆の6種類の文書の分析を通して、従来の保育唱歌研究の中でその存在が謎に包まれていた「六球」の唱歌がどのようにして作られたのか、その一端を明らかにすることにある。文書の分析の結果、9曲からなる「六球」の唱歌は、最初の1曲が作られ、それに続けて赤色から間色までの8曲がほぼ同時に作成されていたことがわかった。特に、赤色・黄色・青色の3曲については、何度も歌詞の推敲がおこなわれていたことが明らかになった。

(2013年10月1日受稿)